

## かかりつけのお医者さん

大平 忠

住んでいるマンションから二分のところ、メディコプラザという医者長屋（私が勝手に名付けている）があり、五軒のクリニックと薬局が開業している。その中のKクリニックが、月に一回は必ず行く「かかりつけのお医者さん」である。

医師のKさんは循環器内科が専門、私は心房細動の持病があるので診てもらっている。

五年前にこの地に引っ越して以来の付き合いだが、不思議なご縁がある。かつての会社の上司は福岡の修猷館高校・九大の出身で、当時の親友の息子がKさんなのだ。しばらく経って、Kさんは家内の従姉妹の遠縁だということも分かった。福岡市一六〇万人の中での巡り合わせに驚くしかなかった。

Kクリニックは、九時に始まるが、八時半になると、Kさん自らが玄関を開け、マットを二枚所定の位置に置き埃を払う。次に待合室を点検し、飾ってある二つの花瓶の花の状態をチェックしてくたびれた花を摘んだりしている。この花は、玄関に近い方は大輪のカサブランカと決まっており、反対側の壁には、一週間に一度花屋が花瓶に活けて持つてくるそうだ。花瓶の横には撮った写真を置き花の名前の説明が書いてある。待合室の両面の壁には、抽象画の小ぶりの絵が七、八枚掛けてあり、時々一斉に違う絵になる。「壁の絵が変わりましたね」と言うと、「見てくれましたか」とにっこりする。自分の趣味を生かしながら、患者の気分も和ませる待合室だ。

K医師の診察の腕前は分からない。必ず聴診器を当て喉を覗き手を診るので、P Cしか見ない医者よりも丁寧で安心だ。年一度特殊撮影をしてもらう大病院とのやりとりも息が合っているようだ。

Kさんは、私の人生最後の「かかりつけのお医者さん」である。